

機関番号：32697

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820060

研究課題名（和文） 古写本を用いた源信著作の文献学的研究—『往生要集』『要法文』を中心に—

研究課題名（英文） Philological Research into Genshin's Works on the Basis of Manuscript Testimony: Focusing upon the *Ōjō yōshū* and the *Yō hōmon*

研究代表者

上杉 智英 (UESUGI TOMOFUSA)

国際仏教学大学院大学・仏教学研究科・研究員

研究者番号：50551884

研究成果の概要（和文）：

本研究は古写本を用い、源信(942-1017)の著作を文献学的に再検討するものである。特に現在の流布本とは異なる跋文を有する平安・鎌倉期写『往生要集』『要法文』を対象とし、書誌学的調査・翻刻・跋文の読解を実施することで、成立年次・撰述状況に対する従来の誤った認識を是正するものであり、以降の『往生要集』『要法文』研究にとって文献学的基盤として機能するものである。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this project is to re-visit Genshin's (942-1017) works by focusing my research on the manuscript testimony. The main texts which will be studied are the *Ōjō yōshū* and the *Yō hōmon* whose manuscript versions dating back to the Heian and Kamakura periods have postscripts different from the currently circulating versions. The detailed bibliographical survey, diplomatic edition, and translation of the postscripts which I intend to undertake will correct many of the current errors regarding the date and historical background of these texts. It is thus hoped that this will serve as the philological basis for any future research into the *Ōjō yōshū* and the *Yō hōmon*.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,040,000	312,000	1,352,000
2010年度	910,000	273,000	1,183,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,950,000	585,000	2,535,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 印度哲学・仏教学

キーワード：源信、往生要集、要法文、古写本、跋文、撰述年次、文献学

1. 研究開始当初の背景

申請者は、国際仏教学大学院大学で仏教文献学を学び、科学研究費助成研究(「金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的

研究)、「比叡山西塔北谷正教坊聖教を巡る訓点資料の基礎的研究)に研究協力者とし、また学術フロンティア(「奈良平安古写経研究拠点の形成)に研究補助員(RA)、研究員

(PD)として参加し、大阪金剛寺、名古屋真福寺、名古屋七寺、滋賀西教寺、京都智積院、奈良西方寺、神奈川金沢文庫等に所蔵される平安・鎌倉期の古写経・古聖教を多数実見し、論文発表してきた。

源信の著作に関しては『要法文』の成立年次・撰述の由来が誤伝されていることを古写本を用い実証、訂正した(「源信撰『要法文』の撰述年次について」『印度学仏教学研究』55-2、2007)。また従来、散逸とされてきた『往生要集』注釈書である真源撰『往生要集裏書』を翻刻紹介し(「県立金沢文庫蔵「往生裏書」解題・翻刻」『仙石山論集』2、2005)、真源の行実を明らかにした(「真源撰『往生要集裏書』について」『佛教大学総合研究所紀要別冊浄土教典籍の研究』、2006)。

これらの研究を通じ、江戸刊本と古写本の相異、古写本に基づく文献批判の必要性、また源信の著作に対する、資料の搜索と批判が十全に行われていない現況を強く認識し、本研究の着想に到った。

(1) 『往生要集』

従来の『往生要集』研究は、完本で書写年代が古く、訓点の付された神奈川最明寺蔵本(11世紀後半写)、京都青蓮院蔵本(1171年写)が善本として依用され、仏教学の分野では、他の諸本を用いた研究はなされてこなかった。一方、国語学の分野では、鈴木一男氏により、諸本とは異なる跋文を有する奈良興福寺蔵本(鎌倉期写、以下、興福寺本)が紹介されている(「興福寺本往生要集」『南都仏教』25・28、1972)。ただし氏の主眼は「国語史資料としての価値について言及すること」にあり、同跋文については「文章の欠損脱落だけでなく全体として極めて不整合な本文をもっている」と評されるだけで、内容の読解、諸本との関係等は検討されていない。仏教学の分野でも、最明寺蔵本、青蓮院蔵本より書写年代が新しく、漢字仮名交書である興福寺本が、研究の対象とされることはなかった。しかし近年、善本とされる青蓮院本(1171年写)よりも書写年代の古い『往生要集』の注釈書である『往生要集依憑記』(1167年写、以下、依憑記)が紹介された(善裕昭「真源『往生要集依憑記』について」『浄土宗学研究』32、2006)。そこに興福寺本と同じ跋文の引用が確認されたことにより、興福寺本が『往生要集』の古態を留めている可能性が浮上し、改めて興福寺本の資料価値、並びに跋文を検討する必要が認められた。

(2) 『要法文』

源信撰『要法文』二巻は五蘊・十二処といった仏教の基礎概念百ヶ条に対し、主に『俱舍論』を用い解説したものである。大江匡房撰『続本朝往生伝』には源信の常の言葉とし

て「俱舍・因明は穢土において極めた」と記されており、源信の思想基盤の解明には、俱舍学という視座が不可欠である。源信の俱舍学水準の検証に際し、本書の読解は非常に有効であるが、従来の研究は『往生要集』を思想の頂点とみなし、その基盤たる本書には注目されていない。

申請者は既に一部の平安・鎌倉写本を調査、撮影し、真福寺蔵本、金剛寺蔵本、西教寺蔵本、金沢文庫本、東京大学史料編纂所本のデータを収集済みである。それら古写本と流布本の跋文を比較検討することにより、従来の流布本跋文に基づく誤った撰述年次・撰述の由来等を訂正したが(「源信撰『要法文』の撰述年次について」『印度学仏教学研究』55-2、2007)、これは古写本に基づく『要法文』の再検討を促すものである。

2. 研究の目的

本研究は、現在の流布本とは異なる跋文を有する平安・鎌倉期写『往生要集』『要法文』を対象とし、書誌学的調査・翻刻・資料批判を行い、跋文を解読することで、成立年次・撰述状況に対する、従来の誤った認識を訂正し、源信(942-1017)の著述群の中へ正しく位置付け、源信の思想を正しく分析・検討する為の基盤を築くことを目的とするものである。

(1) 『往生要集』

興福寺本・『依憑記』・流布本にみられる異なった跋文を比較検討し、前後関係を明確にすることで、『往生要集』跋文の古態と変遷を明かにする。

その上で、跋文改変の宗教的意味と、『依憑記』撰述の理由の源泉を、『往生要集』の文類(諸経典からの抄出の類従)という形態に求め、『往生要集』の撰述、跋文の改変、『依憑記』の撰述という異なる事象の因果関係を解明し、正しく把握することを目的とする。

(2) 『要法文』

『要法文』に関しては既に一部の原本調査、撮影を実施し、真福寺蔵本、金剛寺蔵本、西教寺蔵本、金沢文庫本、東京大学史料編纂所本の画像データを収集済みであるが、更に寺院・文庫等の目録による現存諸本の所在リストを作成し、原本調査を行う。その上で収集済みの古写本・流布本データとの比較を実施し、翻刻、校訂本文の作成を目指す。

3. 研究の方法

(1) 『往生要集』

興福寺本は虫損が酷く、漢字片仮名交書の跋文については鈴木氏の紹介を始め、『大日本史料』第一篇之二十三(1985)、『興福寺典

籍文書目録』第一巻(1986)にも翻刻、採録されているが、何れも異同が散見する。そこでまず鈴木氏『初期点本論攷』掲載の影印、並びに東京大学史料編纂所所蔵のマイクロフィルムの紙焼き写真に基づき翻刻を行う。その上で『依憑記』に「要集奥云」として引用される漢文体引文、並びに流布本の跋文と対照することにより、興福寺本跋文の推定復元を行う。

次に三者を読解し、対照することで、各跋文の成立前後を確定し、跋文間にみられる差異を時系列に沿って把握することにより、『往生要集』跋文の原初形態と変遷の軌跡を明らかにする。

以上の文献学的検討を経た上で、跋文改変の宗教的意味と、『依憑記』撰述の理由の源泉を、経典の要文集という『往生要集』の著述形態、並びにそこに吐露される引文不備への危惧に求め、『往生要集』の撰述、跋文の改変、『依憑記』の撰述という異なる事象の因果関係を明らかにする。

(2)『要法文』

申請者は既に一部の原本調査、撮影を実施し、名古屋真福寺本、大阪金剛寺本、滋賀西教寺本の画像データ、神奈川金沢文庫本、東京大学史料編纂所本の紙焼きを所有しており、これらの諸本が、現行の流布本とは異なる形態、跋文を有していることを既に確認済みである。

その成果を踏まえ、更に寺院・文庫・図書館の目録を整理し、現存古写本の所在を明確にし、リストを作成する。その内、原本確認の必要があるものについては、原本調査、調書の作成、撮影を行いデータの収集に努める。収集した古写本の画像データに基づき翻刻・読解を行い、諸本と本文比較することにより校訂本を作成し、源信の俱舎学を分析・検討する為の基盤を築く。

4. 研究成果

(1)『往生要集』

①『往生要集』に関しては、従来「文章の欠損脱落だけでなく全体として極めて不整合な本文をもっている」と評されてきた興福寺本跋文を、鈴木氏『初期点本論攷』掲載の影印、並びに東京大学史料編纂所所蔵のマイクロフィルムの紙焼き写真に基づき翻刻を行い、流布本、『依憑記』にみられる跋文と比較対照することにより、従来の翻刻の誤りを訂正し、文意の通る形へと推定復元を行った。

②上記、推定復元した跋文を含む三者を読解、比較検討することにより、それら跋文が、

『依憑記』(永観三年<985>)

↓
興福寺本(寛和二年<986>夏以降)

↓
流布本(年次不明)

という時系列にあり、その変遷内容は、

『依憑記』(原初形態)

↓
興福寺本(『依憑記』に偈文・毘沙門天の夢告が付加される)

↓
流布本(興福寺本を改訂<抄出への断り書きの削除>)

と、二段階として捉えられることを明らかにした。

③このような跋文変遷の意味する所は、要文集(諸経典からの抄出の類従)という形態をとる『往生要集』が有する引文不備の危惧に起因するものであり、それを解消するものとして毘沙門天の夢告による証誠が付されたものと推測される。一方で『往生要集』所引の経論の出典を提示する『依憑記』は、同様の引文不備の危惧に対し、出典考証を以て対処したものであると改めて位置付けられる。

本研究の特色は、『往生要集』を再検討するにあたって、従来顧みられることの無かった古写本を用いる点にある。善本とされてきた最明寺蔵本・青蓮院蔵本よりも書写年代の新しい興福寺本や、注釈書である『依憑記』を用い、文献批判的に検討することは、従来の『往生要集』研究にはみられない独創的な視点・手法であり、その結果として成立当初の『往生要集』跋文と撰述状況等が明らかになったことは、以後の『往生要集』研究の基盤として大きな意義を持つことが予想される。

(2)『要法文』

①寺院・文庫・図書館の目録を整理し、『要法文』の現存古写本の所在リストを作成した。

②上記目録に基づき身延山久遠寺身延文庫(山梨県)所蔵の『要法文』一点、『往生要集』二点の原本調査、調書作成、デジタル撮影、並びに補陀洛山六波羅蜜寺(京都府)所蔵の原本調査、調書の作成を実施した(六波羅蜜寺本については現在も調査を継続している)。

③既に収集済みの諸本データ(真福寺蔵本、金剛寺蔵本、西教寺蔵本、金沢文庫蔵本、東京大学史料編纂所本)に、身延文庫蔵本を新たに加え、資料批判を行い校訂本文を作成し

た。現在、新たに六波羅蜜寺本を加え、刷新を計っている。

従来、源信の思想研究は専ら『往生要集』を用いてなされてきたが、源信の思想の解明には、俱舎学という視座が不可欠である。源信の俱舎学水準の検証に際し、『要法文』の読解は非常に有効であり、流布本と異なる古写本の集成、並びにそれらに基づく校訂本文の作成は、以後の源信の俱舎学研究の基盤として大きな意義を持つことが予想される。

(3) 今後の展望

上記の研究成果により、源信の思想解明において、古写本を用い再検討することの有効性を実証し得たと思う。本研究では源信の著述の内、『往生要集』『要法文』の二点を対象を絞り検討してきたが、今後の展望としては、源信の他の著述へと検討の対象を広げたい。

なお、この度の研究期間である二年間の内、『要法文』に関しては身延文庫本(2009年度)、六波羅蜜寺本(2010年度)の二点の調査を実施した。現在、校訂本文の刷新を計っている最中であるが、未だ公開には至っていない。これら両本の調査成果を踏まえた校訂本文の完成、公開は今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 上杉智英 「『要法文』撰述年次の再考」、『日本浄土教の諸問題』(浅井成海編、永田文昌堂) 2011年8月刊行予定。査読無し。

② 上杉智英 「『往生要集』跋文の変遷」『印度学仏教学研究』58(2)、194-198頁、2010年3月。査読有り。

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110007573607>

[学会発表] (計1件)

① 上杉智英 「『往生要集』跋文の変遷」、日本印度学仏教学会第60回学術大会、2009年9月8日、大谷大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上杉 智英 (UESUGI TOMOFUSA)

国際仏教学大学院大学・仏教学研究科・研究員

研究者番号：50551884

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし